

■ 修士論文要旨

The Surfing Industry and its Economic Impact in Japan

サーフィン産業の分析と日本における経済効果

神奈川大学大学院 経営学研究科
国際経営専攻 博士前期課程

長谷部 礼於

Leo Hasebe

サーフィンは日本において、メジャーなスポーツであるとは言いがたく、競技人口の高齢化が懸念されている。しかし、海外におけるサーフィンは日本とは真逆で、競技人口の増加が予想されており、若者の間ではファッション的な要素でのサーフィンや、新たなライフスタイルとして注目を集めている。そのような状況の中で、サーフィンがオリンピックの種目の一つとなり、日本が最初の開催国となることが決まった。海外でのサーフィン人気の高まりや、オリンピック競技となったことを踏まえ、今後の日本において、「日本のサーフィン産業はどのようにサーフィンをプロモーションすべきか」、「サーフィンを一つの魅力とする町はどのように周知していくべきか」ということを本論文では考察した。

まだサーフィンがメジャーなスポーツではない日本において、今後どのような経済効果をもたらすことができるのか。サーフィンをビジネスの一環として考えることにどれほどの利益があるのかを提示することが本研究の目的の一つである。海外のデータを基に日本におけるサーフィンを分析し、ビジネスや町興しに繋がる可能性が大いにあることを本論文では提示した。

「第一章：序論」

2020年のオリンピックを控えた日本のサーフィン事情、そしてオリンピック後の日本のサーフィン産業について、私のオーストラリアやハワイでの体験を基に考察した。また、本論文の目的の一つである「サステイナブルなサーフィン産業の構築」について述べ、本論文の価値を提示した。

「第二章：サーフィンの歴史」

サーフィンの起源や、サーフィンがカリフォルニアやオーストラリアへ持ち込まれ、現在の形へと進化を遂げた経緯について紹介し、サーフィンカルチャーが構築されるに至った歴史的背景に関して述べた。

「第三章：マリンスポーツ産業におけるサーフィンの位置づけ」

日本のマリンスポーツ産業の現状、また、その中でサーフィンの位置づけや、競技人口の高齢化等の日本のサーフィン産業が抱える問題点を明確にした。また、海外におけるマリンスポーツの人気を、ビーチカルチャー等の観点から考察し、日本と海外のコントラストを明確にした。

「第四章：サーフボード産業」

サーフィン産業の中心であるサーフボード産業の重要性や価値、サーフボードビルダーが抱える経済的問題やそれを援助する企業の存在を紹介し、今後の日本のサーフボード産業の課題を明確にし、サステイナブルなサーフィン産業を目指しサーフボードビルダーの育成に力を入れることを提案した。

「第五章：サーフィンビジネスと産業」

サーフィンをビジネスの対象として考える海外と日本を比較、日本は趣味をビジネスの対象と考えていないことが問題点だとして指摘した。特にITにおける日本の遅れは、多くの分野において致命的であることを指摘、具体的な改善策として、ドローン等のITを利用した新たなビジネスへの適応を提案した。

「第六章：世界のプロスポーツ産業との比較」

サーフィンとメジャーなスポーツの大会を比べ、サーフィンがチケット収入や動員において不利なスポーツであることを指摘するとともに、動員の確保や収益を上げることを目的とした、イベント一体型の大会を増やすことを提案した。また、競技人口の高齢化にある対策の一環とし、日本の甲子園や、アメリカのカレッジフットボール等のシステムを模範とした、若い世代のサーファーの大会開催や育成に力を入れることを提案した。

「第七章：サーフィン産業とクオリティオブライフ」

サーフィンが産業やビジネスとして発展するための課題や問題点について議論し、サーフィンがもたらす経済効果や海外における研究データの提示を行った。

「第八章：サーフィンの経済的効果」

サーフィンがもたらす経済効果に関する研究を基に、国内外のいくつかのサーフトウンをケーススタディとして提示した。また、波のクオリティ

の低下が町の利益が半減したというスペインのケースを例とし、サーフィンの影響力を明確にした。

「第九章：結論 本論文の価値と日本のサーフィン産業の未来」

サーフィンが持つ経済効果の活用や、サーフィン産業と地域活性の関係性について議論し、サーフィンを町の魅力の一つとした町づくりの重要性を提案した。日本のサーフィン産業は、オーストラリアやハワイのようにサステイナブルでメジャーな産業を目指すべきであると提案し、結論とした。